（城西人文研究第25巻第1号）

# 現代日本語の未完了アスペクトと未来表現

鎌　田　精三郎

## 0. はじめに

本稿は，現代日本語の未来表現について，時制・アスペクト・法などの観点から考察し，さらに英語の未完了アスペクト *be-ing* 形式の表わす近接未来が日本語ではどのような形式で表わされるのかについても考察する。

アスペクトとは，「ある1つの出来事の時間的内部構成の様々な見方」を表わす（Comrie（1976：3））文法的形式である。次の(1)と(2)の例をもとに，アスペクトについて考察して見てみよう。

(1)　a.　John ***is*** mak***ing*** a toy car.

　　b.　John ***has*** already ma***de*** the toy car.

(2)　a.　太郎はおもちゃの自動車を作っ***テイル***。

　　b.　太郎はもうおもちゃの自動車を作っ***タ***。

(1a)(2a)は，「作る」という行為が現在時（時制が現在形なので，これらの文の基準時は現在時である）ではまだ継続中であること—即ち，未完了であること—が述べられている。一方，(1b)(2b)では「作る」という行為が現在時においてはもう完了していることを表わす。Comrie の言う，「出来事の時間的な内部構成の様々な見方」とは，基準とする時点において，その出来事（上の例ではおもちゃの自動車を作るという行為）が完了しておらずまだ継続中なのか，あるいはもう完了しているのかということである。

鎌田（1996）では，日本語の「テイル」形アスペクトの意味と用法について論じた。日本語の「テイル」形アスペクトは，上記(2a)の例が示すように，基準時における未完了アスペクトとして機能することが出来る。(1a)で挙げた英語の *be-ing* 形アスペクトの例も日本語の「テイル」形と同一の機能を果たすこと—即ち，未完了アスペクトとして「出来事が進行中である」こと—を示している。

鎌田（1996）では，日本語と英語の未完了アスペクト「テイル」形と *be-ing* 形では，その働きに違いが見られることも述べている。

（3） a. He *is* com*ing* to see us tomorrow.

b. She *is* leav*ing* on the New York flight tonight.

c. Mary *is* gett*ing* married this spring.

この英語の例はそれぞれ，近接未来—近い未来に述べられている事態が達成されるであろうということ—を表わしている。即ち，ある行為や事態が現在時（例文では現在時制が用いられているので，基準時は現在時となる）にはまだ完結しておらず（例えば，(3b)では，離れるという行為が現在のところまだ完結していないし，(3c)では現在のところまだ結婚していないということが示されている），行為や事態が未来のある到達点に向かって現在進行中であることが表わされている。

日本語の「テイル」形には，この様な近接未来の表現様式はない。例えば，次の(4)の例が示すように，日本語の「テイル」形は，(3)の英語の例では許される未来を表わす時間副詞との共起が出来ない（例文中の * 印は，その文が不可能なことを表わす）。

（4） a. 太郎は（もう／* あした）来テイル。

b. 花子は（すでに／* 来年の春）結婚しテイル。

このように日本語の「テイル」形は，「あした」「来年の春」などの未来を表わす副詞とは共起できないが，「もう」「すでに」などの副詞との共起は出来ることから，英語の *be-ing* 形と違って近接未来を表わすことが出来ない。ここでは，完了の意味が表わされているように見える[1]。鎌田（1996）では，「テイ

ル」を日本語の未完了アスペクト形式として扱ったが，（4）の場合はどのように考えればよいだろうか。このような用法について，次の（5）をもとにもう少し詳しく考察してみよう。

（5）　a.　父は長旅で疲れ*テイル*。

　　b.　会議は6時に始まっ*テイル*。

　　c.　塀が壊れ*テイル*。

鎌田（1996）では，（5）のような「テイル」の事例は，ある事態が完了した後の結果がまだ依然として継続していること，即ちこの「テイル」は結果の未完了を表わすアスペクト形式であるとした。例えば(5a)では，「父が長旅で疲労する」という事態が発生し，その疲労が依然として継続していることを表わしており，また(5c)では過去のある時点で塀が壊れ，今現在その壊れた状態が続いていることを表わしている[2]。上記（4）の例でも，（5）と同様に事態の結果が依然継続中であることが述べられている。ここで用いられている完了を示す副詞「もう」「すでに」は，「来る」や「結婚する」という行為と結びついてその行為の完了を示し，「テイル」はその行為の完了した結果・状態が依然として継続中であり，終了していないことを述べていると言えよう。このような結果の未完了を表わすことが，日本語の「テイル」形アスペクトの大きな役割の1つである。

Smith（1992：114–117）は，英語の未完了アスペクト *be-ing* がこのような結果の継続を表わすのは位置や場所を述べるような限られた場合以外には見られないと述べている[3]。従って，結果の継続という点が日本語と英語の未完了アスペクトの用法の2つ目の違いである。

日本語の「テイル」形と英語の *be-ing* 形の違いは，英語には近接未来という表現形式があるのに対して日本語にはないこと，一方日本語には結果の継続という表現形式があるのに対して英語にはないという点であった。本稿の研究目的が未完了の事態を述べる日本語のアスペクト形式について，未来時との関わりから考察することであるから，この2つの相違のうち，特に前者に焦点を当てて論じることにする。

## 1. 日本語の「テイル」形には本当に近接未来がないか

日本語の「テイル」形には，英語の *be-ing* 形とは異なって，近接未来の用法が存在しないと上では述べた。しかし，一見したところ，近接未来の用法と思えるものが存在する。次の例を見てみよう。

（6） a. 太郎は父に本当のことを言おうとしテイル（ところだ)。

b. 花子は今にも泣き出そうとしテイル（ところだ)。

c. ライオンがシマウマにとびかかろうとしテイル（ところだ)。

ここで注意すべき点は，（6）で用いられているのが単なる「テイル」形式ではなく，「～シヨウトシテイル」という表現形式だということである。「～シヨウ（ト)」は，いわゆる意志未来や未来の出来事の推量を表わす表現形式であると考えられる。例えば，(6a)と(6c)の「言おう（と)」「とびかかろう（と)」という表現は，意志未来を表わし，(6b)の「泣き出そう（と)」は推量を表わす。さらに，「(シ）テイル」は*主語がそういう未来の行為をする（と思える）状況に現在ある*ことを述べる働きをしている。このことは，「(シ）テイル」の後に「～ところだ」という表現形式を付加するならば，この例文がなお一層落ち着いた文になることからも言えることである。このように，（6）の「テイル」が述べているのは，近い未来の事態というよりは，「～という（と思われる）情況に今ある」という点である。

## 2. 法的表現形式と未来

「～（シ）ソウダ」「～（スル）ヨウダ」「～（スル）ダロウ」も未来の事態を述べることのできる表現形式である。これらはアスペクトに属す形式であろうか，それとも別の種類の形式であろうか。次の（7）の例を考察して見よう。

（7） a. このぶんだと，あしたは雪が降りソウダ。

b. 天気予報によると，あしたは雪になるヨウダ。

c.　この天気図からすると，あしたは雪になるダロウ。

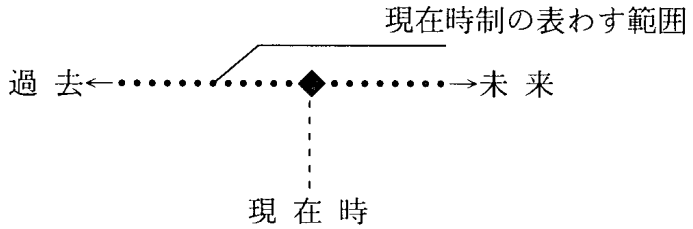
ニュアンスの違いはあるが，それぞれ近い未来にある事態が起こる—即ち「雪が降る（らしい）」—という予測を述べたものであり，これらの表現形式は全て話者の推量を表わすという特徴が見られる。このことは，これらが法的表現（modal expressions）であり，アスペクト表現ではないということを表わしている[4]。上述のニュアンスの違いというのは，それぞれの表現によって表わされる話者の気持ちの強弱である。(7a)は話者自身の情況判断に基づいた近い未来の事態の予測を表わし，(7b)は天気予報を，(7c)は天気図をもとに，明日の天気がどうなるかに対する話者の推量を表わすが，(7b)よりも(7c)の方が明日雪になるという話者のより強い判断が示されている。

このように，（7）の形式で述べている近い未来に起こる事態は，アスペクト形式に基づいているのではなく，法的な表現形式に基づいているのである。

## 3.　現在時制の表わす範囲

日本語では未来の事態を表現するのに現在時制を用いる場合が多い（注（1）参照)。そこで現在時制の用いられる環境について考察する。現在時制は現在時を基点として，過去から未来までの広がりをその範囲とする文法形式である。

（8）　現在時制の領域




日本語では，文法形式としての時制には，過去時制と現在時制しか存在しない[5]。その理由は，（8）が示すように，現在時制形が未来の時間も表わすことができるわけであるから，敢えて未来を表わす特別な時制形式は必要ないためであろう。

### 3.1 現在時制と過去の事態

現在時制が時間の座標軸における過去もその範囲に含むことができるのは，例えば，(9)のような場合である。

(9) a. 私たちが林間の窪地に山荘の焼け跡を見つけたのは，それから二時間ほど後で*あル*[6]。

b. そもそもは佐渡のうまれで，この山国におちついたのはおよそ十年ほどまえで*あル*。

(9a)では，「ル」形の代わりに「タ」形を用いて，「～それから二時間ほど後であっタ」としても何ら問題はないし，意味的にもさほど変化がない。(9b)は本来は過去の内容であるが，表現効果の上から現在時制の「ル」形を使っていると考えられる[7]。

### 3.2 現在時制と現在の事態

現在時制が現在の状態を表わす例は，次の(10)である。

(10) a. 屋根の上に猫が一匹*いル*。

b. その本ならテーブルの上に*あル*よ。

c. 沈丁花の香りが*すル*ね。

d. ここからオリオン座がよく*見えル*よ。

純粋な状態動詞と言われるのは，(10a)と(10b)だけであり，(10c)と(10d)は人間の感覚（すなわち，嗅覚と視覚）を表わす表現である。これらの感覚を表わす動詞は，ある事態の継続を述べる動詞（すなわち，沈丁花の香りがずっと漂っていること，またオリオン座を見ることができる状態にあることをこれらの動詞が表わしている）であり，また「～テイル」と共起すると非文になったり，座りが悪くなったりすることがあるから，これらの動詞は状態性動詞と分類可能であろう[8]。このような理由から，ここでは感覚動詞を状態動詞の仲間と分類することにする。

日本語では，現在時制が現在時の動作・行為を表わすことができるのは，非

常に限られた場合である。

(11)　a.　ピッチャーがとって一塁に*おくル*。ランナーアウト。

b.　木村庄之助軍配を*かえしマス*。

c.　次に水を少々*加え*，よく*かきまぜマス*[9]。

(11)の例はすべて眼前で展開する事態について述べる場合である。(11a)と(11b)はスポーツ中継の例であり，(11c)は料理の実演番組の例である。なお，事態の展開という観点からのみ見るならば，(10c)と(10d)もこの類に当てはまるかもしれない。しかし，(11)には，上述のような事態の継続性という特徴が見られないので，(10c)と(10d)は(11)とは異なる事例であると見なすことにする。

(12)　a.　鍵はテーブルの上に*おきマス*よ。

b.　ここに冬期オリンピック長野大会の開会を*宣言すル*。

c.　心から*お詫びいたしマス*。

(12)は発言と行為が同時の場合である。中でも(12b)と(12c)は遂行動詞と呼ばれる動詞であり，発言自体が一つの行為を遂行するという事例である。(12b)ではこの発言と同時に「宣言」行為が遂行されたことになり，長野オリンピックが正式にスタートしたことが示される。(12c)では，この発言によって「謝罪」行為が遂行されたことになる[10]。このように，(12)は現在時制が現在時の行為を表わすもう一つの事例である。

### 3.3　現在時制と過去から未来に至る範囲に広がる事態

現在時制が基準時である現在時の左右に広がる領域（すなわち，過去のある時点から未来のある時点までの領域）を範囲とする事例について考察する。

(13)　a.　私は毎朝6時に*起きル*。

b.　父は広告会社に*勤務すル*。

c.　毎年，おおぜいの人たちがその島を*訪れル*。

これらの例は反復繰り返し，あるいは習慣とよばれる事例である。(13)では，述べられている事態が，ある過去の時点においても，現在時においても，さらにある未来の時点においても必ず生起する，すなわちその事態がこれらの時点

で必ず真になるのである。

現在時制はさらに(13)よりももっと広い領域を範囲とすることができる。

(14) a. 地球は太陽の周りを*回ル*。

b. 水は100℃で*沸騰スル*。

c. 鯨は哺乳動物*であル*。

d. 三角形の内角の和は2直角*であル*。

(14)の動詞形はすべて現在時制形をとっているが，意味的には全く時間の制約を受けない（すなわち，timelessな）事例である。時間の制約を受けないということは，この命題が過去においても，現在も，さらに未来においてもすべて成り立つこと—すなわち，真（true）となること—を意味する。(14a)を例にとるならば，現在時制形を使うことによって，今から百年前でも，昨年も，昨日も，今日も，これからもずっと地球が太陽の周りを回りつづけていることが述べられるのである。

### 3.4 現在時制と未来の事態

現在時制形が未来時を表わす例について考察する。現在時制形が未来の事態を表わすのは非状態動詞の場合であり，状態（性）動詞では現在時制は現在の状態しか表わさない。例えば，上記(10)の例文をもとに考えてみよう。

(15) a. 屋根の上に（今／*あした）猫が一匹*いル*。

b. （今／*あした）沈丁花の香りが*スル*。

c. *あしたになれば*，沈丁花の香りが*スル*（*ダロウ*）。

(15a)と(15b)は現在の状態について述べている事例であるから，「あした」という時間副詞との共起が許されないが，(15c)のように「あしたになれば～スル」という場合は何らかの変化を予期する表現となる。ただし，この文は未来の確定的な変化を表わせない内容であるから，話者の推量を示す法的表現形式「～ダロウ」を用いた方が自然である。このことから，非状態動詞の現在形が未来時を表わす場合は，何か確定的な内容でなくてはならないことになる。

(16) a. クリントン大統領は今年の六月に中国を*訪問スル*。

b. 次の総会は来年の三月十日に*開催しマス*。

c. 山田君は今年の秋に*結婚すル*。

(16)の例は非状態動詞の現在形が未来の出来事を表わす例である。すべて何らかのスケジュールに従って予定の組まれている，未来の確定的な出来事を表わしている[11]。

## 4. 英語と日本語の近接未来形式

日本語の未完了相「テイル」には，英語の未完了相 *be-ing* 形が表わすことのできる近接未来表現がないということを上で述べた。それでは，日本語ではどんな表現形式で近接未来を表わすのであろうか。日本語の近接未来はどんな文法形式—時制によるのか，それともアスペクトによるのか，あるいはこれ以外の形式なのか—によって表わされるのだろうか。このセクションの目的は，この2つの問題について論じることである。

### 4.1 英語の近接未来形式

このセクションでは，*be-ing* 形式による英語の近接未来について考察する。以下がこの事例である。

(17) a. The Browns *are coming* to dinner.

b. Where *are* you *going* for your next holidays?

現在進行形が近接未来を表わすのは，往来・発着の動詞—例えば，come, go, depart, start, arrive, leave など—のような限られた動詞であると言われている。(17a)はブラウン一家がディナーに来るという予定が今現在進行していることを，(17b)は今度の休日にどこに行く予定が今進行しているのか相手に聞いていることを表わす事例である。*be-ing* 形による近接未来が，主語のやろうとする予定が現在進行中であると述べるものであるならば，往来・発着の動詞以外にも進行形による近接未来表現が可能なはずである。

(18) a. We'*re* probably *spending* next weekend at home.

b. What *are* you *doing* this evening?[12]

c. Mary *is getting married* next spring.

(19) a. John *is rising* at 5 tomorrow morning.

b. * The sun *is rising* at 5 tomorrow morning.[13]

(19a)と(19b)を比べて，(19b)が容認不可能なのは，主語のタイプの違い—すなわち，主語が動作主か否か—による。(19a)の主語は John という人間であるから，動作主として自分の意志で行為を行うことができるのに対して，(19b)の主語は自分の意志で日の出の時間を決められない—動作主ではない—のである。(18)～(19)で示した近接未来とは，現在の予定・手はず・計画をもとにして文の主語が自分の意志で未来に行うと予測される行為について述べるものである。

### 4.2 近接未来形式の日英比較

日本語では，上記(18)(19)で挙げた英語の近接未来表現の内容をどのような方法で表わすかについて考察してみよう。

(20) a. こんどの週末には（おそらく）家にいる（だろう）。

b. 今晩何をしますか。

c. 花子は来年の春結婚する（そうだ）。

d. 私は明日の朝5時に起きる（ます）。

e. 太郎は明日の朝5時に起きる（つもりだ）。

日本語では，英語の(18)と(19)の近接未来表現は，現在時制形で表わすのが普通である。しかし，日本語の特性として，「おそらく」などの推量を表わす副詞が共起する場合には，「ル形（マス形）」は使わず，「～だろう」や「はずだ」のような推量の法的表現を使わなければならない。もう一つの日本語の特性として，第1人称の場合には「ル（マス）形」が近接未来を表わしても何ら問題がない（(20d)を参照）が，第3人称主語の場合には，動詞の現在時制形で終わる時に，特定の文脈が与えられていないと何か座りの悪さがみられ，伝聞の「～そうだ」や意志の「～するつもりだ」，予定を述べる「～予定だ」などの表現を伴うと安定することがある。このように，日本語における近い未来の予定・

意志を述べる形式として，現在時制や「～だろう」「～するつもりである」などの法的助動詞，「～予定である」などの未来のことがらについて述べる述語表現を使う。(18)(19)に挙げるような近接未来の内容を表わす場合には，日本語は英語のようにアスペクトを用いることはないのである。

## 5. 達成動詞のアスペクト表現——～テイルと～カケテイル

このセクションでは(21)のような *be-ing* 表現について考察してみよう。ここで挙げた *die*, *drown*, *fall down* と言った動詞は，鎌田（1996）によれば，達成（achievement）動詞と区分される動詞である。これらの動詞は[＋動態性]，[－継続性]，[＋完結性]特性を持つ動詞である。

(21) a. The old man *is dying.*

b. A dog *is drowning* over there.

c. London Bridge's *falling down.*

(21)の様な *be-ing* 形は次の(22)の *be-ing* 形とどの様に異なるのだろうか。

(22) a. John *is making* a toy car.

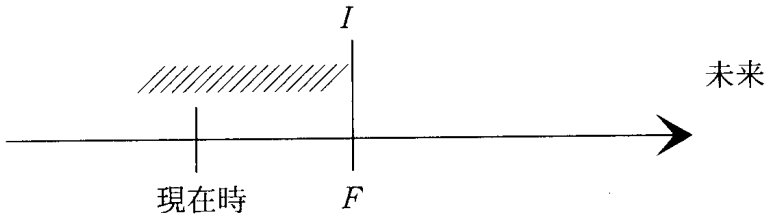
b. Father *is reading* a newspaper in the living room.

c. Someone *is knocking* at the door.

(22a)(22b)の動詞は鎌田（1996）では活動動詞と呼んだものであり，(22c)の動詞は一過性動詞と呼んだものである。(22a)と(22b)では基準の時点である現在時に *make* や *read* と言った行為が進行中であることを表わし，(22c)では現在時の前後に *knock* という行為が繰り返されることを述べている。

ところで，(21)の動詞が進行相の *be-ing* 形と一緒に用いられた場合は，(22)の場合とは異なる結果になる—すなわち，ごく近い未来に到達する（だろう）完結点に向かって，今その行為が進展していることを述べるものである。この関係を図式化するならば，(23)のように表わすことができよう。

(23) 達成動詞の進行形が非常に近い未来に到達する（だろう）完結点に向かって推移中であることを示す意味の概略表示




説明：$\left.\begin{matrix} I \\ | \\ F \end{matrix}\right\}$ は達成動詞の述べる事態が達成される時点

//////// は事態が達成に向かって推移する状況

本稿では，(23)で示した時間的推移関係を表わす形式も近接未来を表わすと見なすこととする。なお，英語では(21)で示したように，*be-ing* のアスペクト形式をとることができるが，日本語の達成動詞は(21)のような場合に，どのような表現形式をとるのか，それがまた英語のように近接未来と見なすことができるか，以下で考察することとする。

### 5.1 日本語の達成動詞の表わす事態の推移

(21)で挙げた英語の達成動詞の推移情況—すなわち，近接未来のもう1つのの事例—は，日本語では(24)のように表わすことができると思われる。

(24) a. その老人は（もうすぐ）死に***ソウダ***。
その老人は死に***カケテイル***。

b. 犬が溺れ***テイル***。
犬が溺れ***ソウダ***。
犬が溺れ***カケテイル***。

c. ロンドン橋が落ち***ル***（***ゾ***）！

英語と同様に，(24)で用いられている日本語の動詞—「死ぬ」「溺れる」「落ちる」—は，鎌田（1996）では達成（achievement）動詞と分類されている。この類の動詞は，［－継続性］［＋完結性］特性—すなわち，動詞によって述べられる結果が一瞬のうちに達成され，なんらかの帰結が得られる—をもつ動詞

である。日本語のこの種の動詞は，「テイル」というアスペクト形式が付属すると，事態の進行を表わさず，むしろ結果の状態を表わす（例えば，「ガード下で，猫が一匹***死んデイル***」のような場合)。

それでは(24)の例を順に考察してみよう。「死ぬ」の場合，「テイル」形式が付属すると*結果の状態*の意味を表わすのが普通であるが，完結点に向かって「死ぬ」という事態が進行中であり，まだ完結点に到達していない（まだ死に至っていない）ならば，(24a)に示すように「～（し）ソウダ」「～カケテイル」のような形式を付属させることができる。ただし，「～（し）ソウダ」については，上述のように話者の推量を表わす法助動詞表現であるから，アスペクトとは見なされない（§2参照のこと)。それに対して「～カケテイル」の場合はどうであろうか。これは「**カケル**＋テイル」の形式からなるが，まず手始めに「～カケル」について考察することにする。「～カケル」自体は動詞の連用形に付属して，その事態が進行途中にあり，まだ終了していない（完結点に到達していない）こと（以下の(25)の事例)，あるいはある事態が始まったばかりであること（以下の(26)の事例）を述べる補助動詞である[14]。以下に，「～カケル」のこの2つの用法の例を示す。

(25)　a.　読み***かけ***の本

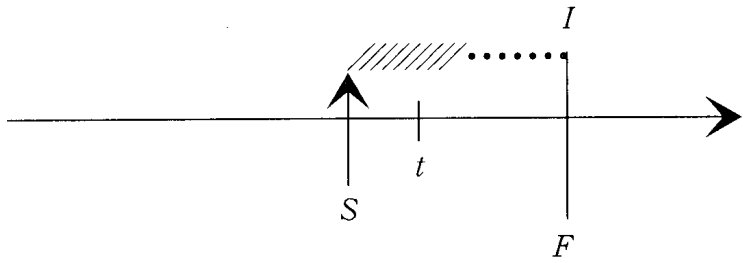
　　b.　壊れ***かけた***橋

(26)　a.　観客は席を立ち***かけた***。

　　b.　殴られ***かけた***ので，急いで逃げた。

「カケル」に「テイル」の付属した「カケテイル」はどのような情況を述べるのに用いられるのであろうか。「テイル」自体が基準時にある事態が継続・進行中であることを表わす付属形式であるから，(24a)の「死にかけている」は，情況から判断して，その老人は，例えば病気が重く，死の一歩手前に今いることが，(24b)の「犬が溺れかけている」は，犬が水の中でアップアップしておりこのままいけば間違いなく溺れてしまうというような時に用いる表現である。「～カケテイル」が達成動詞とともに用いられた場合に表わす意味の概略を図式化するならば，次の(27)のようになるであろう。

(27) 「～カケテイル」が達成動詞とともに用いられた場合の意味




説明：////////— ある事態の継続，例えば(24b)の場合，犬が実際に溺れてしまうまでのもがくなどの情況が推移していることを表わしている。////////の後に続く•••••は，「カケテイル」が推移の始まったばかりの情況や推移途中の情況のみを述べており，実際に完結点に到達するかどうかは白紙の状態であることを表わしている。

*S*—上記の事態 //////////の開始時点を示す。

*t*— 基準時（上記の(24a)(24b)の例では現在時)。

*I*—*F* 動詞によって述べられる事態が一瞬に達成することを述べる（例えば，「死ぬ」という事態は一瞬のうちに起こる）

上記(27)の説明で述べたように，(24a)(24b)の「～カケテイル」表現は基準時tにおける情況のみを述べるものであり，実際にその事態が達成される(た）かどうかは述べられていない—すなわち，これらの表現ではその老人が実際に死に至るのか，その犬が実際に溺れるのかは述べられないのである。この点は，英語の(21a, b)の例でも同じである。

次に(24b)の「犬が溺れテイル」について考察する。「溺れる」は達成動詞であるから，このようなテイル形は今までの論理からすると結果の状態の継続—すなわち，犬がもう溺れて，例えば水に浮いている，というような状態が続いているというように—ととることになるはずである。実際，犬が溺れて水に浮かんでいるような時にこの表現を使うことができるので，結果の状態と解釈可能である。しかし(24a)は眼前で犬が実際に溺れてしまいそうな事態が展開している場合にも使えそうである。この意味の場合には，「溺れる」という動詞は達成動詞というよりも，一過性動詞にテイルが付属したことによって，反

復・繰り返しの意味を持つ場合に準じた結果を生んでいる—例えば，何度も水の中で浮いたり沈んだりアップアップを繰り返している状態—と考えられる。

「溺れる」という事態について，(24b)では*テイル・ソウダ・カケテイル*の3種類の表現様式を挙げたが，溺れるという事態が確実に起こるかどうかについて，微妙な違いがあるように思える。この違いについて，次の(28)に表示する。

(28)「溺れる」という事態の起こる確率

0%＿＿＿＿＿＿50%＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿100%

〈溺れソウダ〉〈溺れカケテイル〉　〈溺れテイル〉

(28)で挙げる確率50%とは，その事態が起こる場合もあるし起こらない場合もあるということであり，確率100%は確実に起こったということを示す。「溺れる」については，話者がその情況をどう見るかによって，法的表現を選択したり，アスペクト形式でも「～カケテイル」か「～テイル」のいずれかを選択すると思われる。

「カケル」について，さらに重要な点は，連体形として名詞を修飾する場合と文の述語として機能する場合の形式上の違いである。(29)が名詞を修飾する事例であり，(30)は述語の事例である。

(29)　a.　死に*カケタ*老人

　　b.　川で溺れ*カケタ*犬

　　c.　崩れ*カケタ*土塀

(30)　a.　一人の老人が橋の下で死に*カケテイル*（*タ*）。

　　b.　あっ，犬が溺れ*カケテイル*。

　　c.　ここいら辺りの土塀はみな崩れ*カケテイル*。

(29)の事例が示すのは，「カケル」が名詞を修飾する場合にはタの形式をとるということである（これは決して，英語のように動詞の過去分詞形が形容詞として名詞を修飾しているとは言えない。(29c)は英語でいう過去分詞形には当てはまるかもしれないが，(29a, b)は決して当てはまらないからである）。

一方，(30)の述語の場合には，*テイル*形式が付属する。*テイル*形アスペクトが付属することで，基準時（(24)では現在時）の状態（つまり，ある完結点に

至るまでの途中の推移状態―(30c)でいうならば，現時点では土塀の崩壊はみられるが，完全に崩壊してしまうまでの途中の段階にある）を表わしている。(29)のような名詞修飾の場合には，基準時点での状況という意味は表わされず，基準の時点という読みが加わらない「これこれの状況にある×××」という意味しか述べないのである。

「カケル」は，事態が完結点に向かって推移している途中にあることを表わすと上で述べたが，ここで新たに注意しなければならないのは，事態が推移している最中に停止してしまった（ように見える）場合もあるという点である。次の(31)の例を見てみよう。

(31)　a.　そこをのぼりつめると，崩れカケタ山小屋が突然現れた。

　　b.　入り口には，壊れカケタ椅子が１つ。そしてその上には，なぜか腐りカケタ（ノ）りんごが１つ。

(31)は「崩れる」「壊れる」「腐る」という事態が達成してしまう時点（すなわち，完結点）までの途中段階で，その推移中の状況が一見止まってしまったような表現内容である。次の(32)の例はまさに推移する状況が途中で止まってしまったことを述べるものである。

(32)　a.　途中まで行きカケタが，思い直して帰ってきた。

　　b.　電車は動きカケタが，突然止まってしまった。

この例ではまさに，「行く」「動く」という事態が完結しない（すなわち，達成されない）で，途中で停止してしまった（(32b)では，動き始めてすぐに停止してしまった）が述べられている。

「カケル」が用いられると，その事態が推移する途中で止まった（ように思える）ならば，途中の段階が一瞬のうちにすぎてしまい，推移状況が表わしにくい場合にはどうなるであろうか。そこで(24c)を考察してみることにする（ここで，(24c)を(32b)として再度挙げることにする）。

(32)　a.　ロンドン橋が落ちカケテイル。

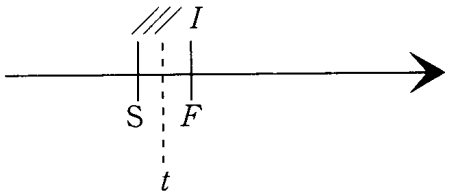
　　b. ロンドン橋が落ちル（ゾ）！（＝24c）

(32a)は，基準時（現在時）に，ロンドン橋が今にも崩れ落ちそうな状況が見ら

れ，いずれこのままにしておけば近い将来に必ず崩れ落ちてしまう（完結点に到達してしまう）ような場合—すなわち，推移状況が途中で止まったままになっていることを表わす—に使う表現である。この場合に「橋が落ちる」という状況が達成されるまでにかなり長いタイム・スパンがあることが表わされている。

それに対して(32b)は，眼前でロンドン橋が落下していくような場合—すなわち，達成までの推移状況が瞬時である場合—に使われる。(32a)の時間的な意味関係は，上記（27）で示す通りであるが，(32b)の場合は(33)に示すように，橋が落下が完結するまでの事態の継続期間は極めて短いのである。

(33)「ロンドン橋が落ちるぞ！」における事態の継続時間と到達点




(32b)の場合には，(33)に示したように，橋が落ちる情況の始まった時点（S）から落下すると言う事態が完結する到達時点（$I-F$）までの継続期間（///）は非常に短く，この情況が途中で止まることがない場合の表現様式である。このように，眼前で展開して行く事態を述べたり，極めて近い未来にある出来事が（確実に）起こるというような状況について述べるときは，日本語では現在時制形である「ル形」を使うことになるのである。

(34)　a.　そんなところで泳ぐと溺れ*ル*ぞ（よ）！

　　b.　真っ黒な雲がやってきたから，もうすぐ雨が降*ル*ぞ（よ）！

日本語では，現在時制形を用いて未来の出来事を述べるとき，確定的な未来の事柄（例えば，韓国大統領が今年の10月に日本を公式訪問すル。）を表わすのはもちろんのこと，英語ならば *be-ing* 形で表わすような極めて近接した未来の事柄でも表わす場合があるのである。

### 5.2「カケル（カケテイル）」形式の付属する動詞のタイプ

「カケル」「カケテイル」形式はどんなタイプの動詞と共起できるのだろうか。

達成動詞とのみ共起できるのであろうか。それとも全てのタイプの動詞と共起できるのであろうか。このセクションでは，この2つの形式がどんなタイプの動詞に付属するか考察する[15]。

(35) a. 食べカケタ（ノ）りんご　[食べる—活動動詞]
b. 薄れカケタ記憶　[薄れる—完成動詞]
c. 読みカケタ（ノ）本　[読む—活動動詞]
d. 走りカケタ電車（に飛び乗った）　[走る—活動動詞]
e. 妻に手をあげカケタがやっとのことで思いとどまった。
[手をあげる——過性動詞]
f. 手紙を書きカケタところに突然電話がかかってきた。
[書く—活動動詞]
g. 病気で死にカケタ。　[死ぬ—達成動詞]

(35a, b, c)のカケタは「食べる」「薄れる」「読む」という行為・事態が完結するまでに至らない途中の段階にあることを述べており，(35d)の場合は電車が走り出した情況を意味する。(35e)の場合は，手をあげようと思ったがそこまでは至らなかったことを，(35f)は(35d)と同様に手紙を書き始めた情況を，(35g)は「死ぬ」という事態には至らなかったがその情況に行きそうになったことをそれぞれ表わす。(35)に挙げた動詞の種類をみると，カケルは状態動詞を除いたほとんどの動詞に付属できるように思える。カケルはある行為・事態が完結・達成されてはいないが，そこに至るなんらかの状況が始まったばかりであるか，あるいは達成点に至る途中の段階にあること，そしてこの状況は事態の完結に向かってまだ進行して行くかもしれないし，途中の時点で停止してしまうかもしれないということを表わす。それゆえ，完結点に向かって推移して行くような状況を表わすことのできる動詞には自由に付属することができるが，完結点に向かって推移していく状況など考えられない動詞には付属できないことになる。カケルの付属できない動詞には，基準時における状態を述べる状態動詞や完結点に向かって推移していく状況など考えられない「勝る」・「そびえる」などの動詞がある[16]。

これに対して，「カケテイル」が文の述語としてどんなタイプの動詞に付属できるかを考察しよう。「カケル」だけなら，(35)で示したように，活動動詞・完成動詞・一過性動詞・達成動詞と4つのタイプの動詞と共起することができた。しかし，「カケテイル」の場合には，もっときつい制限がありそうに思える。

(36)　a.　この辺の土塀はほとんど**崩れ**カケテイル。

b.　台風のせいで大きな木が何本も**倒れ**カケテイル。

c.　数日前にきれいに雑草を取ったのに，あちらこちらにもう**生え**カケテイル。

d.　収穫もされずに，たくさんのみかんが木になったまま**腐り**カケテイル。

(37)　a.　*そのとき，りんごを食べカケテイタ。　［食べる―活動動詞］

b.　？電話が鳴ったとき，手紙を書きカケテイタ。［書く―活動動詞］

c.　？そのとき，列車はもう動きカケテイタ。　［動く―活動動詞］

a.　*そのとき，みな太鼓を叩きカケテイタ。　［叩く――過性動詞］

b.　*今，私はドアをノックしカケテイル。［ノックする――過性動詞］

(36)は「～カケテイル」が文の述部となっても容認可能と思われる例であり，(37)は容認不可能（*印の例）か人によっては一部認める（？印の例）と思われる例である。上でも述べたように，～カケテイルが述部に用いられた場合，完結点に至るまでの途中にある基準の時点で推移中の状況（場合によっては，その状況が途中で停止することもある）を表わす。容認可能な(36)の例をみると，「崩れる」「倒れる」は達成動詞―すなわち，［－継続性］［＋完結性］素性を持つ動詞―であり，また「生える」「腐る」は完成動詞―すなわち，［＋継続性］［＋完結性］素性を持つ動詞である。それに対して，容認不可能な，あるいは疑わしい(37)の例では，活動動詞と一過性動詞が用いられており，この2つのタイプの動詞に共通する素性は［－完結性］特性である―すなわち，行為者がその行為を続けようと思う限り続けられ，その行為自体が自然に到達する終結点が存在しないということである（注(15)参照)。以上を考慮すると，［＋完

結性]特性を有する動詞で，完結点に至るまでの途中の推移状況—「倒れる」の場合は木が傾いているなどの状況—にあることを表わすことができるならば，「カケテイル」が文の述語として用いられてもなんら問題がない[17]。

次に，(37)の容認不可能な，あるいは疑わしい例を考察する。「食べカケのりんご」，あるいは「ご飯を食べカケタとき電話が鳴った」のようすれば，カケルの表わす推移中の状態—すなわち，食べ始めの状況にあること—が意味を持つようになるので容認可能となる。つまり，「食べ始めの状況で放置されたリンゴ」とか，「食べ始めの状況にある時に電話が鳴った」ということは有意味な状況である。しかし，(37a)のように「〜カケテイタ」が文の述語として現れると，述べられた状況が有意味ではないと判断され，容認可能性が極めて低くなる—「状況が推移している途中に‥‥という事態が起こった（あった）」と述べられて初めて，カケルの表わす意味が満たされたと判断される。あるいはまた，「推移し始めた状態のままの‥‥」と表わされた場合にも，カケルの表わす意味内容が満たされていると判断できる。(37b)は主節と従節の順序を入れ替えて，「手紙を書きカケタところに電話が鳴った」とすれば，カケルの表わす「手紙を書き始めた状況」が自然な文の意味の流れを生み出す。(37c)は，列車が動き始めたという状況を述べているのであるが，このような場合に「動きかけた」を用いると，「しかし，その後にその列車は停止した」というような内容が続かないと十分な内容とは言えなくなってしまう。ある時点に列車が動き始めたという情況を述べるのであれば，「動き*出シタ*」という表現を使うのが妥当であり，「そのとき，列車はもう*動き出シテイタ*」とすれば，何も問題が生じない。(37d, e)の「叩く」「ノックする」も「カケル」を付随させる場合，その後に「でも叩く（ノックする）のを止めた」と続く内容が来ないと，意味上満たされない文になる。(37)のような場合には，「ある行為を始めた」ということだけを述べようとするのであれば，「みな太鼓を*叩き**始めた***」「私はドアを*ノックし**始めた***」とすれば普通の自然な文となるであろう。

以上のように，カケルはアスペクト表現の1つとして，ある事態が始まったばかりの状況やある状況が始まり事態の完結点（達成点）に向かって推移し

ている最中であることを述べる働きがあるが，さらに付加的にその状況が途中で停止する（かもしれない）という意味合いが現れることもある。(35)で示したように*カケル*は［－状態性］動詞と共起することができるのに対して，*カケル*が*テイル*と一緒になり，*カケテイル*という文の述語形式になると，全ての動詞に自由に付属することができなくなる。［＋完結性］特性を持つ完成動詞や達成動詞と共起して，事態の完結点に向かって推移している途中の段階を述べるのであるが，場合によってはその推移途中で停止するかもしれないという付属的な意味を表わす。すなわち，*カケテイル*では*テイル*（*タ*）が基準の時点を設定し，この基準時点において，推移している状況が近い未来に到達点に至るかもしれない（途中で止まってしまう場合もあるが）という意味を表わすのである。ごく近い未来に事態が完結するかもしれないという観点から，本稿では，この*カケテイル*を日本語の近接未来表現のアスペクトとして分類することにする。

(37)に示したように［－完結性］特性を持つ活動動詞や一過性動詞では，*カケテイル*が用いられると不自然と思えるケースがほとんどである。不自然になる理由として考えられるのは，*カケテイル*の表わす基準時点において推移中の状況が途中で停止してしまうかもしれないという意味合いとこれらの動詞の述べる事態とが相容れないということから来るのではないかと思われる。［＋完結性］特性を持つ完成動詞や達成動詞（完結までの時間の長短はあるが，これらの動詞では事態が完結するのが自然であるから）が，完結に向かって推移している途中に達成されないで停止したことに何か意味がある（例えば，壊れカケテイタと言えば，*壊れる*という達成動詞の意味の中には「*こわれる*」という完結点が自然に含み込まれているが，*カケテイタ*が付属することで壊れ始めた状況があるが途中で停止した状態にあることが述べられ，この停止状態が意味を持つのである）。［－完結性］特性を持つ活動動詞や一過性動詞は，表わす動作・事態が（止めようと思うまで）いつまでも続けることができるという自然な完結点を持たない動詞であるから，完結点に向かって推移している状況の途中の時点でその事態が停止したということには，それほどの意味はな

い。このような場合には，単に事態がスタートし，完結点に向かい始めたとことを述べればそれで十分であり，文の述語としてカケテイルではなく，～シハジメル（シダス）を用いるならば意味的に自然な文が構成されることになる。～シハジメル（シダス）というアスペクト的な述語形式は，事態が始まったこと（そしてその始まったという状況のみを）表わすのである。

このように日本語では，英語の未完了アスペクト *be-ing* 形の表わすことのできる近い未来に完結されるであろう事態について，［－完結性］動詞の場合には「～シハジメル」「～シダス」「～カケル」および現在時制のル形で述べ，［＋完結性］動詞の場合には，現在時制のル形と「カケル」＋「テイル」からなる「カケテイル」を用いることになる。

## 6. もう1つの未完了アスペクト形式——～（シ）ツツアル

日本語にはテイル形のほかに，基準時にある事態が進行中であることを表わすことのできるもう1つの未完了アスペクト形式がある。それは「～（シ）ツツアル」という形式である。この形式が「テイル」形式と，さらに「～（シ）カケテイル」形式とどんな違いがあるのか，あるいはどんな類似性があるのか，このセクションで考察することにする。

### 6.1 未完了3形式の比較

ここでは，「テイル」「カケテイル」「ツツアル」という3つの未完了アスペクト形式について，比較分析を試みる。

次の(38)と(39)はこの3つの未完了形式を対比したものである。

(38) a. 伝統の火が（今では）消えテイル。

b. 伝統の火が消えカケテイル。

c. 伝統の火が消えツツアル。

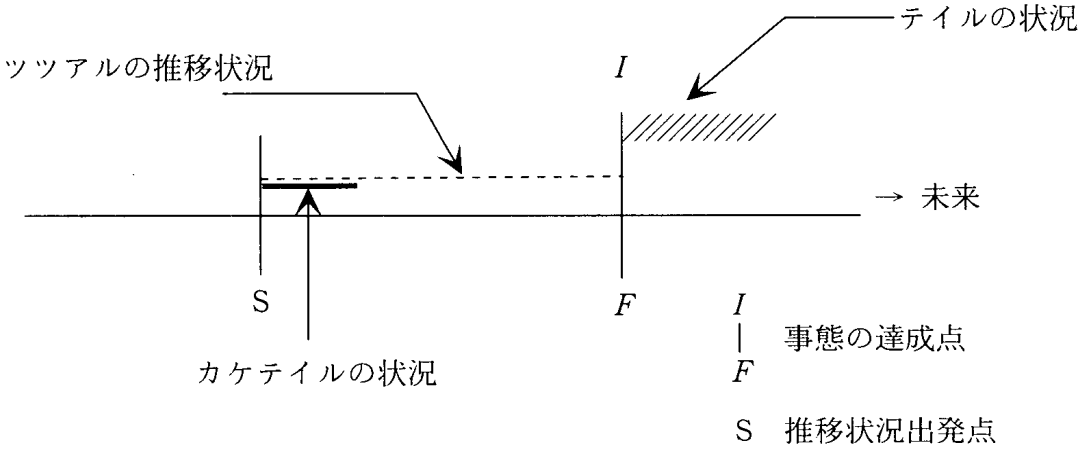
(39) a. 新体制は（もはや）崩れテイル。

b. 新体制が崩れカケテイル。

c.　新体制が崩れツツアル。

(38)と(39)を比較すると，この3つの用法の違いが分かる。ここで用いられている「消える」「崩れる」という2つの動詞は，それぞれ達成動詞である。従って，テイル形の付属した(a)の文では，結果の状態の継続という意味になり，(38)では伝統が消えて今は見られない状態にあることを，(39)では新体制がもはや崩れて立ち行かない状態にあることをそれぞれ表わす。(b)のカケテイル形式は，「伝統が消える」「新体制が崩壊する」という事態の到達点に向かって，現時点（＝基準時）では状況が推移し始めていることが述べられている。(c)のツツアル形式は，「伝統が消える」「新体制が崩壊する」という事態の到達点に向かって，現時点では進行状況にあることを表わす。鎌田（1996）が主張したように，達成動詞（および完成動詞）は，テイル形アスペクトを用いて事態が到達点に向かって進行中であることを述べることはできない。このような場合，テイル以外のアスペクト形式を用いなければならず，そこで選択可能なのがカケテイルとツツアルの形式である。ただし，この2つの間には意味の違いが存在し，カケテイルはその動詞の述べる事態の到達点に向かって状況が推移し始めたことを，ツツアルはその動詞の述べる事態の到達点に向かって状況が推移している最中であることを表わすものである。以上の意味の違いを図式化すれば，次の(40)のようになる。

(40)　(38)(39)の事例における「テイル」「カケテイル」「ツツアル」の意味の違い



### 6.2 カケテイルとツツアルの用法上の違い

*カケテイル*と*ツツアル*の用法を比較した場合に，*ツツアル*に比べて*カケテイル*の方が使用制限がきつい。次の例を比較してみよう。

(41) a. 台風は東寄りに進路を変え*ツツアル*。

b. *台風は東寄りに進路を変え*カケテイル*。

(42) a. 臨教審第三次答申が（•••• に）活かされ*ツツアル*ようだ。

b. *臨教審第三次答申が（•••• に）活かされ*カケテイル*ようだ。

ここで用いられている「変える」「活かされる」はともに達成動詞と見なされるもの（従って，*テイル*形が付属した場合，ともに結果の状態の意味になる）である。(41)(42)から分かるように，これらの動詞が*ツツアル*と共起しても自然な日本語になるが，*カケテイル*と共起した場合は日本語として不自然で許されないと思われる。*カケテイル*の共起が許されないとすると，事態の到達点に向かって推移し始めた状況を上記の動詞はどのような形式で表わすことになるのであろうか。これらの動詞が，このような状況を表わす時に用いるのが，アスペクト的な意味を持つ「**～（し）始める（た）**」という動詞である。(41)(42)にこの動詞形式を用いて，事態の到達点に向かって推移する何らかの状況を表わしたとしても，次の（41b′)(42b′)に示すように，日本語としてまったく問題のない文になる[18]。

(41) b′. 台風は東寄りに進路を変え*始めタ*。

(42) b′. 臨教審第三次答申が（•••• に）活かされ*始めタ*ようだ。

このように，*カケテイル*形式と共起できない動詞には，*～シハジメル*のようなアスペクト的な意味を有する動詞をその後に付属させることによって，事態の到達点（(41b）で言うならば，台風の進路が東寄りに変わってしまうこと）に向かって（台風の進路が）移り始めた状況を述べることができるのである。

### 6.3 テイルとツツアルの用法の違い

ここでは，*テイル*形と*ツツアル*形の用法の違いについて考察する。この2

つはともにある事態・状況が進行中であるということを述べるものであるが，上述のように，*テイル*形が完成動詞と達成動詞に付属した場合には，結果の状態の意味に解され，事態の進行中という意味にはならない。このような動詞を用いて，進行中の状況という意味を表わす場合には，ツツアル形式あるいはカケテイル形式が選択されると推測される。そこで，次のような予測をたてることにする。

『*テイル形式が付属して事態が進行中であると述べることができる動詞には，ツツアル形式が付属して進行中の状況を述べることはない。*』

この予測が正しいかどうか，次の例で検証してみよう。

(43)　a.　父は今隣の部屋でテレビを**見***テイル*。

　　b.　*父は今隣の部屋でテレビを**見***ツツアル*。

(44)　a.　誰かが今ドアを**叩い***テイル*。

　　b.　*誰かが今ドアを**叩き***ツツアル*。

(43)の「見る」は活動動詞，(44)の「叩く」は一過性動詞であり，テイル形が付属すると，動作の進行中や動作の反復・繰り返しを意味する。このような動詞は，動作の主体がこの動作を止めようと思うまでいつまでも動作の継続や繰り返しを行うことができるので，自然な到達点が存在しない。従って，これらの動詞では，動作の継続進行・反復進行は表わすことができるが，事態の到達点に向かって何か状況が推移しているということは述べることができないわけである。ツツアルは事態の完結点に向かって何らかの状況が推移している最中であることを述べるための補助動詞であるから，(43b)(44b)に示すように，このような活動動詞・一過性動詞には共起できないのである。従って，(43)(44)に関しては，上の予測は正しいことが示された。

次に，*テイル*と*ツツアル*がともに共起できる事例について検討しよう。

(45)　a.　さまざまな方法・手段が**導入され***テイ*ます。

　　b.　さまざまな方法・手段が**導入され***ツツアリ*ます。

(46)　a.　真相が**明かされ***テイル*。

b. 真相が**明かされ**ツツアル。

(47) a. 「保・保連立」を模索する動きも活発に**なっ**テイル。

b. 「保・保連立」を模索する動きも活発に**なり**ツツアル。

(48) a. 「冷たい関係」が**エスカレートし**テイル。

b. 「冷たい関係」が**エスカレートし**ツツアル。

(49) a. 大勢は連立復帰に**まとまっ**テイル。

b. 大勢は連立復帰に**まとまり**ツツアル。

(50) a. 首相候補には（もう）村山委員長で**固まっ**テイル。

b. 首相候補には村山委員長で**固まり**ツツアル。

(45)～(50)で用いられている動詞は完成動詞（(45)～(48)）と達成動詞（(49)(50)）である。従って，すべてのテイル形式は結果の状態を表わしている。それに対して，すべてのツツアル形式は事態の到達点に向かって目下進行状況にあることを述べている。「事態・状況の進行」という観点から，(45)～(50)のテイル形とツツアル形の現われ方調をべると，相補分布をなしていることが分かる。すなわち，(45)～(50)のように，テイル形とツツアル形どちらも現れることのできるケースでは，テイル形が結果の状態を，ツツアル形が事態の到達点に向かった何らかの状況の推移をのべるのである。この点に関しても，上の予測が正しいことが示される。ツツアル形が何らかの状況の推移を述べられる場合には，テイル形は事態の進行は表わすことができず，結果の状態をあらわすのである。上記の予測は，テイル形とツツアル形どちらも現れる場合には，その意味が必ず相補分布をなすことも予測できるのである。なお，(49)と(50)にカケテイル形式を付属させて，事態の到達点に向かって何らかの状況が推移し始めているということを述べることも可能である。(45)～(48)では，到達点に達し始めた状況を述べる場合にはカケテイルよりも「～（し）始めタ」「～（し）出しタ」が用いられるであろう（注の(18)参照)。

日本語のツツアル形式は，カケテイル形式と同様に近接未来を表わすアスペクト表現の1つと見なしてよいだろうか。ツツアルもカケテイルと同様に，基準の時点では，まだ事態の到達点に達せず，その到達点に向かって何らかの

状況が推移している最中であることを述べるものである（(50b)を例にとるならば，まだ固まっていないが，固まる方向で推移していることが述べられている）から，カケテイル形式と同様に，本稿では近接未来を表わす未完了アスペクトの1つと見ることにする。

## 7. むすび

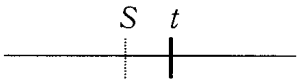
英語の未完了アスペクト *be-ing* 形は，動詞の述べる事態が①基準時に継続・推移すること，②反復・繰り返しをすること，③その事態が近い未来に起こること，のいずれかを表わす。一方，日本語の未完了アスペクト *テイル*形は，英語の *be-ing* 形と同様に動詞の述べる事態が基準時において推移・継続，反復・繰り返しを表わすと同時に，もう1つ英語にはない事態の結果の状態（[＋完結性]動詞の場合）を表わす。日英語の未完了アスペクト *テイル*形と *be-ing* 形とを比較した場合，その相違点は①英語には近接未来という表現形式があるのに対して日本語にはないことであり，②日本語には結果の継続という表現形式があるのに対して英語にはないということである。本稿では，この2つの相違点のうち特に②に的を絞り，日本語の未完了の事態を述べるアスペクト形式が近い未来に起こる（であろう）事柄を表わすことができるのかどうか，そしてできるとすればどんな形式をとるのか，またその場合の意味するところはどういう点なのかということに焦点を当てて論じてきた。

英語では *be-ing* 形で表わすことのできる近い未来に起こる事態について，日本語では，確実性が高いときには現在時制の*ル*形，話者の推量が伴う場合には法的表現形式「～ダロウ」，[＋完結性]動詞については「カケル」＋「テイル」からなる「カケテイル」や「ツツアル」を用いることにより述べられる。

「カケル」は単独では，推移情況の考えられる全ての動詞に付属し，*タ*形を取って体言として名詞を修飾できる（「走り*カケタ*列車」「腐り*カケタ*りんご」など)。この場合の「カケタ」の意味は「～*し始めタ*」の意味に近いものである（例えば，「*動き始めタ*車（に飛び乗る)」)。なお，この場合には，*タ*形が

現れるのが正しい形式であり，現在形のル形が現れると容認不可能となるよだ（「*走りカケル列車」「*腐りカケルりんご」「*動き始めル列車（に飛び乗る）」）。この場合のタ形は，過去を表わすタと言うより，英語で言うところの完了形のタと見なした方がよかろう。このことは次の図から理解できよう。

（51）「動きカケ**タ**列車に飛び乗る」の時間的な意味




$S$：列車が前に動き出した時点
$t$：基準時＝飛び乗る時点

(51)では，$t$ の時点ではもうすでに列車が動き出してしまっていることが表わされており，この**タ**は完了形のタであることが理解できる。完了形であるとすると，文の動詞が現在形でも過去形でも，この**タ**はタのままである（「動きカケ**タ**列車に飛び乗っタ」）。

「カケル」は文の述語としても機能できる（「病気で死にカケタ」「車に轢かれカケタ」など）が，この場合は文の動詞の表わす事態の到達点（「死んでしまう」「車に轢かれてしまう」ということ）に向かって状況が推移し始めたが，状況が途中で停止してしまったために到達点に到達せずに済んだことを表わす。

「カケテイル」は文の述語形式であり（「このりんごは腐りカケテイル」「木が倒れカケテイル」など），文の動詞の示す事態（「腐る」「倒れる」ということ）にまだ完全に到達はしていないが，そのような事態になり始めているか，あるいはそのような事態に到達する途中の状況にあることを述べている。また，付属的な意味として，推移途中の状況で停止した（ように見える）という意味合いが生まれることもある。

上述のように，「カケテイル」は「カケル＋テイル」からなり，もとの「掛ける」や「懸ける」の意味が保持されていないので，本稿では日本語のアスペクトの一形式と見なし（注(14)参照），英語の *be-ing* 形が表わす近接未来の働きの一部を担うことのできる（なぜなら［＋完結性］動詞とのみ共起できるから）日本語の未完了アスペクトとの１形式とする。

日本語にはある事態が進行中であることを述べることのできるもう１つの未完了アスペクト形式がある。これは「ツツアル」形式であり，この形式は「テ

イル」が付属して事態の進行の意味を表わせない完成動詞・達成動詞，すなわち［＋完結性］動詞とのみ共起できる―「カケテイル」と「ツツアル」はともに［＋完結性］動詞と共起できるということになる。ただし，「カケテイル」の方が「ツツアル」に比べて動詞との共起制限がきつい（［＋完結性］動詞でありながら，「第三次答申が法案に活かされツツアル」はOKであるが，「第三次答申が法案に活かされカケテイル」はおかしい)。この制限は，「カケテイル」の表わす意味に，動詞の示す到達点に向かって何らかの状況が推移し始めたがその状況が途中で停止してしまうかもしれないという付随的な意味を持つためと思われる。その状況が推移し始めていることのみを述べようとするならば，「～（シ）ハジメル」「～（シ）ダス」というようなアスペクト的な表現形式を用いる（「第三次答申が法案に活かされハジメタ（ハジメテイル)」は容認可能である)。これらは，純粋に「×××が推移し始めた」という状況のみを表わす表現形式であるから，～カケテイルと違って問題はない。

「ツツアル」は［＋完結性］動詞に付属して，動詞の述べる到達点に向かって推移している最中であり，まだ事態が完了していないこと（しかし，近い未来に事態が完了するかどうかは未定の状況にあること）を述べるアスペクト形式である。事態が推移しているということを述べる点で，「ツツアル」と「テイル」はそれぞれ相補分布の関係にあり，［－完結性］動詞では「テイル」が必ず用いられ，［＋完結性］動詞では「ツツアル」が用いられたり，場合によっては「カケテイル」というアスペクト形式や「～シハジメル」「～シダス」というアスペクト的意味を持つ動詞が使われることもある。本稿では未完了アスペクトとしての「カケテイル」と「ツツアル」はともに動詞の述べる事態の完結点（到達点）に向かって推移する状況を述べるものであり，基準時にはまだ完結点に到達していない（近い未来に到達するという保証もない）という点から，これら2つの形式を日本語における近接未来表現と見なすこととする。

以上，本稿では，日本語の未完了アスペクト「テイル」の意味と用法，ならびに「テイル」の周辺でその意味と用法を補っている時制，他のアスペクト表現，法的表現，アスペクト的意味を持つ動詞表現などについて考察した。

本稿では，現在時制，未完了アスペクト形式—*テイル*，*カケテイル*，*ツツアル*—と法的な述語形式—*ダロウ*—ならびにアスペクト的な述語諸形式—～（*シ*）*ハジメル*，～（*シ*）*ダス*—について，時間の流れの中における事態・状況の推移とどのように関わるかということについて，考察を加えてきた。これらの働きについて，次のページに表にしてまとめることにする。なお，以下の事例はすべて，これら諸形式の働きを具体的に示すものであり，事例の番号は次ページの表の番号に対応するものである。

次ページの表に対応する事例

① アメリカ大統領は今年の6月に中国を公式*訪問す***ル**。

② 明日は雨になる**ダロウ**。

③ 父は今公園でジョギングを*し***テイル**。
父は最近朝に散歩を*し***テイル**。
この地域ではたびたび地震が*起こっ***テイル**。

④ たくさんのみかんが収穫もされずに木になったまま*腐り***カケテイル**。

⑤ 台風は東に向きを*変え***ツツアル**。
さまざまな方法・手段が*導入され***ツツアル**。

⑥ 新体制の足並みが早くも*崩れ***カケテイル**。

⑦ 新体制の足並みが早くも*崩れ***ハジメタ**。
新体制の足並みが早くも*崩れ***ダシタ**。

⑧ このりんごは*腐っ***テイル**。
さまざまな方法・手段が*導入され***テイル**。

⑨ あっ，ロンドン橋が*落ち***ル**（ぞ）！

※ この表における★——★は，時制が必ずその未完了アスペクトかアスペクト的述語に関わることを，また…は当該形式がその意味に当てはまらないことを示す。

| 意味＼形式 | | 時制 | 未完了アスペクト | | | 法的述語 | アスペクト的述語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | テイル | カケテイル | ツツアル | | |
| 未来 | 確定的 | 現在形（ル形）① | … | … | … | … | … |
| | 不確定 | … | … | … | … | ダロウ（推量）② | … |
| 事態の進行反復・繰り返し | | ★ | ★ 活動・一過性動詞③ | … | … | … | … |
| 近接未来 | 状況の推移 | ★ | … | ★ | ★ 完成・達成動詞⑤ | … | … |
| | | ★ | | ★完成・達成動詞④ | | | |
| | ある状況が始まった状態 | ★ | … | ★ 完成・達成動詞⑥ | … | … | … |
| 事態の始まり | | ★ | … | … | … | … | ★～シハジメル・～シダス⑦ |
| 結果の状態 | | ★ | ★ 完成・達成動詞⑧ | … | … | … | … |
| 眼前での事態の一瞬の進行 | | 現在形（ル形）⑨ | … | … | … | … | … |

《注》

（1） 日本語では，英語と違って，事態の進行・継続を表わす未完了アスペクトが未来を表わさない。後述するように，日本語では「あした」「来年の春」のような未来を表わす時間副詞が現在時制と共起できるので，現在時制が未来を表わすのである。

(a) 太郎はあした来る（ます）。

(b) 花子は来年の春結婚する（します）。

（2） 寺村（1984, pp. 125–127）では，このような「テイル」の用法を，「既然の結果の存在」と位置づけている。

（3） Smith の挙げる *be-ing* 形が結果の継続を表わす例には以下がある。

(a) Your socks *were lying* on the bed.

(b) The statue *is standing* on the corner.

（4） 文の内容に対する話者の心的態度を一般に法（mood）と言い，（7）で挙げた「ソウダ」「ヨウダ」「ダロウ」は全て，明日の天気が雪になるということに対する話者の気持ちを表わすのに用いられている。アスペクトはある基準の時点にある事態が完了しているのか，それとも未完了になっているかということであるから，違いは明白であろう（*c.f.* Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Language.* George Allen and Unwin, Ltd., 313f)。

（5） 正確に言うならば，時制形式には過去時制と非過去時制の2つがある。いわゆる現在時制は，現在時のみならず過去の一部から未来までの広い時間的広がりをその範囲とすることができるから，過去と非過去の対立と見たほうがより事実をとらえた記述と言えよう。過去と非過去（ないしは現在）との対立は，文法形式上「タ」形と「ル」形の対立として現れる。

（6） 寺村（1984），p. 91。

（7） 寺村（1984），p. 94 参照。

（8） 寺村（1984），pp. 99–101 参照。

（9） 国立国語研究所（1985），pp. 158–159 参照。なお，日本語の現在形の終止形は「ル」形であるというが，この中には「ダ」や丁寧体の「デス」「マス」も含める。

(10) 山梨（1986），pp. 9–52 参照。

(11) 寺村（1984），pp. 98–99 参照。

(12) 以上の例は，Swan（1980），496 による。

(13) 浅川・鎌田（1986），pp. 133–135 参照。なお，日の出が何時になるか計算できるので現在時制を用いた次の表現は許される。The sun *rises* at 5 tomorrow morning.

(14) 補助動詞か否かを決定する要件の1つとして，付属して使われている場合に元の意味が保持されるかどうか（例えば，「掛ける」や「懸ける」などの意味がそ

のまま保持されるかどうか）がある。

(15)　活動動詞は「走る」「歩く」などのように，一定の持続時間があり，行為者が止めようと思うまで継続できる行為を表わす動詞，完成動詞とは「疲れる」「太る」などのように，一定の持続時間が必要で何らかの達成点が見られる動詞，一過性動詞 は「叩く」「打つ」などのように，一回きりの動きを表わし，行為者が止めようと 思うまで繰り返すことのできる動詞，達成動詞は「始まる」「終わる」「死ぬ」「着く」のように，ある情況から別の情況へ一瞬の間に変わり，何らかの帰結をもたらすような動詞をそれぞれ意味する。詳細は鎌田（1996）を参照のこと。

(16)　カケルが付属する場合でも，「話しカケル」「笑いカケル」は「～に対して‥‥スル」の意味になり，ここで論点となっている「カケル」とは異なるので除外する。

(17)　注の(16)で挙げた「話しカケル」「笑いカケル」は，このまとまり自体を1つの形式と捉え，活動動詞と見なしたほうがよかろう。なぜなら，この2つは，さらにテイル形と結びついて，「話しカケテイル」「笑いカケテイル」となり，「話しカケル」「笑いカケル」という行為が基準時に継続中であることが表わされるからである。

(18)　「～（し）始める」をアスペクト的な意味を持つ動詞としたのは，このような用法においても，この語本来の意味が失われることなく，保持されるという点にある。「～（し）始める」と同じアスペクト的な意味を持つ動詞としては，「～（し）出す」がある。

## 参考文献


1)　浅川照夫・鎌田精三郎（1986）：『助動詞』新英文法選書　第4巻　大修館書店。

2)　金田一春彦（1950）：「国語動詞の一分類」金田一編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（1976），pp. 5-26。

3)　＿＿＿＿＿（1955）：「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（1976），pp. 27-61。

4)　工藤真由美（1995）：『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間表現』ひつじ書房。

5)　国立国語研究所（1985）：『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版。

6)　鈴木重幸（1972）：『日本語文法・形態論』むぎ書房。

7)　＿＿＿＿＿（1976）：「日本語動詞のすがた（アスペクト）について―～スルの形と～シテイルの形」金田一編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（1976），pp. 63-81。

8) 高橋太郎（1976）：「すがたともくろみ」金田一編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（1976），pp. 117–153。
9) 寺村秀夫（1984）：『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
10) 吉川武時（1976）：「現代日本語のアスペクトの研究」金田一編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（1976），pp. 155–327。
11) 山梨正明（1986）：『発話行為』新英文法選書　第12巻　大修館書店。
12) 鷲尾龍一・三原健一（1997）：『ヴォイスとアスペクト』日英語比較選書　第7巻　研究社出版。
13) Comrie, Bernard (1976): *Aspect,* Cambridge University Press.
14) _____(1985): *Tense*, Cambridge University Press.
15) Dahl, Östen (1981): "On the Definition of the Telic-Atelic (Bounded-Nonbounded) Distinction," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp. 79–90.
16) Hornstein, Norbert (1990): *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar,* MIT Press.
17) Jespersen, O. (1924): *The Philosophy of Language,* George Allen and Unwin.
18) Leech, Geoffrey (1987): *Meaning and the English Verb* 2nd Edition, Longman.
19) Mourelatos, Alexander P. D. (1981): "Events, Process, and States," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp. 191–212.
20) Smith, Carlota S. (1981): "Semantics and Syntactic Constraints on Temporal Interpretation," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp. 213–237.
21) _____(1992): *The Parameter of Aspect,* Kluwer Academic Publishers.
22) Swan, M. (1980): *Practical English Usage,* Oxford Univ. Press.
23) Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press.
24) Vlach, Frank (1981): "The Semantics of the Progressive," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp. 271–292.